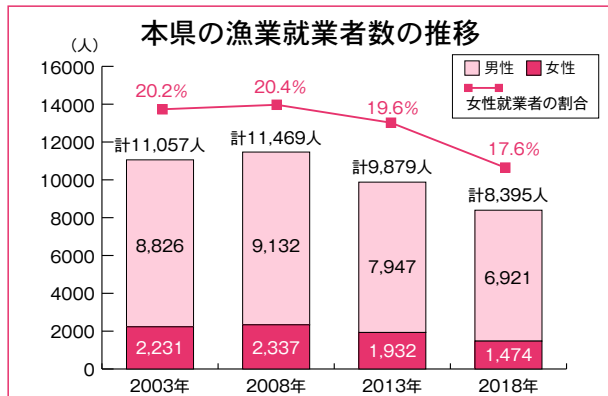


漁業の未来を担う 女性の活躍

近年、国では「漁業女子」プロジェクトが進められ、女性にとって働きやすい水産業・漁村の現場改革や、女性の活躍が後押しされています。

水産業・漁村における、女性が中心となって取り組む多種多様な活動の魅力に迫りました。



資料：農林水産省「漁業センサス」

*家族経営協定：農林水産業に携わる各世帯員が、家族間の十分な話し合いに基づき、経営方針や役割分担、世帯員全員が働きやすい就業環境等について取り決めるものです。

**減少する漁業就業者
担い手としての女性への期待**

2018年の本県の漁業就業者を男女別に見ると、女性は1,474人(17.6%)、男性は6,921人(82.4%)で、2013年より1,484人(15.0%)減少しています。年齢別で見ると、65歳以上が4割を占めています。

漁業就業者の女性割合は減少を続けていますが、選別・加工など陸での作業では女性の役割が大きく、水産加工に従事する女性は2018年で3,609人、全体の68.0%を占めています。また、むつ湾におけるホタテ養殖経営体では、女性をはじめ、家族が重要な働き手になっています。県内の*家族経営協定の締結漁家数は7戸(2017年度)となっています。

実例

漁師と結婚 ～漁業レポート～

本誌編集スタッフ 大畑彩美の実例をご紹介します



私は2016年春に新聞社の記者として下北地域に赴任し、その後、佐井村の漁業政策の取材で出会った漁師と結婚しました。会社を退職し、2019年5月から佐井村牛滝地区で夫と義父母と暮らしています。

移住後は、小型定置網漁などによる漁獲物の出荷作業を中心に、季節ごとに様々な漁業を経験してきました。磯に生えているヒジキはオリブ色で加工に手間暇がかかることや、刺し網漁で朝4時に船で沖に出るときの緊張感、イルカが跳ねる中での海釣り、タイやヒラメが釣れる時のググッと重い感触など、たくさんの驚きや感動を味わってきました。

また、義母は地区にある産直「牛滝まだあうる」で、タラの乾物やところなど加工品を販売しています。より多くの方と交流し、地元をPRしたいとの思いから、昨年7月には、むつ市で開かれている産直市「しもきたマルシェ」に初めて出店しました。

今後は、様々な加工などを学ぶとともに、消費者・生活者の皆さんに、漁獲物が食べ物になるまでの過程や生産者の思いなど「産地のものがたり」を発信することで、産地の応援者を増やす活動につなげたいと思っています。

また、これまで漁家の女性の労働は見えにくく、正當に評価されないケースが多かったのではないかと推測します。「家族経営協定」の普及や、女性が稼げる場の更なる創出によって、女性がより誇りと自信を持って漁業に携われる社会の実現を願っています。



漁の春夏秋冬(佐井村の主なもの)

5月	ヒジキ採り・加工
6月	刺し網漁
7月～8月	ウニの殻剥き モズクの出荷作業 海釣り
9月	岸壁釣り
12月～1月	タラの出荷作業 イワノリ採り

「インタビュー」 水産業・漁村で女性が中心となって活動する事例

男性も女性も関わり合って いい仕事ができる

下風呂漁協女性部の活動

1990年の下風呂漁協女性部設立以来、部長を務めています。風間浦村が特産品開発を目指して海産物の加工販売にも力を入れるようになったため、女性部設立数年後から、フノリやワカメ、昆布などの加工を担うようになりました。例えば、フノリ1袋を詰めれば80円。これを何百、何千こなせば、8万円、9万円を稼げます。漁師の夫を支えるため、外に働きに出ることが難しい女性たちが、自分で働いて、お金を手にすることができるようになったので、みんな喜んでいました。

このほか、フノリ採り体験ツアーや、

ゆかい村海鮮どんぶりまつり、風間浦村鮫鯨感謝祭など村内の催しにも協力。村外のイベントに出展しPR活動も行っています。また、地元の小学校でイカ飯作り、べこもち作り、生ソバ作りなど様々な体験活動も展開しています。小学生との交流は、海や魚のことを伝える機会にもなり、地域の伝統の普及にもつながります。

環境への思い

私は、青森県が農山漁村の女性リーダーを認定する「Vic・ウーマン」に1995年に認定され、1997年にはヨーロッパを巡り、環境問題について学びました。また、琵琶湖の汚染について

学ぶ機会があり、環境を守るための活動にも力を入れてきました。

合成洗剤による海の汚染を防ぐ目的で、小学校で廃油石けんの作り方を教える活動を行ってきたほか、アクリルたわしの使用を広く呼び掛けてきました。また、ポイ捨て防止のため、20隻以上ある下風呂漁協の漁船に手作りのごみ袋を積んでもらいました。活動の背景には、「この海で生活している」との思いがあります。

べこもちとの出会い

大間町の方から梅の花や桜の花のべこもちをいただき、「ああ、すごいな」と感動したのがはじまりです。40歳を過ぎた頃から、いただいた図案を見ながら、ひとりで毎日のようにべこもちを作り、練習を重ねました。当初はアヤメの花を作っても、子どもから「咲きすぎた花に見える」「ナポレオンの帽子みたい」と言われましたが、今では様々な花のほか、お雛様やこいのぼり、サンタクロースなど何種類もの絵柄を手掛けています。

現在は、「べこもち工房かさい」を構成え、下風呂の朝市や、むつ市内でべこもちや総菜を販売しています。

家族経営協定

「べこもち工房かさい」では、青森県農山漁村女性起業育成・フォローアップ事業等を活用し、今年から高齢者宅への配食サービスを始めます。この新事業がきっかけとなり、2019年12月に夫と家族経営協定を結びました。協定の内容は、仕事や家事の役割分担や報酬、互い

の介護についてなどです。

夫は長年、トロール船や遠洋漁業船で働いてきましたが、10年ほど前からは下風呂で海藻やウニ、アワビ、タコ漁などを営んでいます。協定締結前から、互いに協力し、漁業と工房の仕事に取り組んできました。また、手が空いている方が何でもやることにしていて、夫がご飯作りをすることもあります。協定を結ぶことに対して、夫の反対はなく、日頃からより良くするために話し合うことを大切にしていきます。

漁業に携わる方へのメッセージ

私のモットーは「一生懸命やって、失敗って気づいたら、後戻りしてもう1回やる」です。挑戦しないとわからないことがあります。

漁家は農家に比べて男性の仕事が多く、男社会。しかし、女性はきちんと意見を言うべきですし、男性は、女性の目から見た漁業というものも、話として聞くべきだと思います。男性も女性も関わり合って、いい仕事ができるのではないのでしょうか。



全国的にみても、漁業協同組合等の女性役員は約0・5%にすぎません。今後は漁協等の職員に登用されるようスキルアップ支援とともに、家族経営協定の締結等による女性の経営参画が進んで、水産業・漁村における活躍の場が増えることが望まれます。

(取材…大畑 彩美)



かさい きょうこ
葛西 恭子さん (風間浦村・74歳)

下風呂漁協女性部長、青森県漁協女性組織協議会長、全国漁協女性部連絡協議会監事大畑町(現むつ市)出身。1990年から、下風呂漁協女性部長として、女性部の幅広い活動を牽引。また、「べこもち工房かさい」を立ち上げ、下北の伝統食「べこもち」や、総菜の加工・販売も手掛ける。2019年12月、夫の秀己さん(78歳)と家族経営協定を締結。夫婦で助け合い、漁業と工房の仕事に取り組んでいる。